

＜今回＞358回目 2024年10月21日(月)14時10分～17時 601会議室

読書は3冊目「盗まれた神話」朝日文庫版 本文 より(第1回目) 通算2回目(12冊め)

＜前回＞357回目(24-10-9)出席者8名

資料1)第356回(24-9-23)のまとめ(清水)

- 2)宋史東大寺の僧裔年の日本王代記、神話時代編(清水)
- 3)ミネルヴァ版「盗まれた神話」のはしがき、(追加分)(清水)
- 4)山城分布図(愛媛教育委員会編)(清水)

A 報告 関西八尾市の「古田史学の会」前編集長、服部静尚氏が、来年1月から第3日曜日2時から4時半まで、東京池上会館で、古代史講座を12回、1年間実施する計画書をメールで送ってきたので、早速紹介し、資料を回覧した。参加費千円(資料代)、電話申し込みは090-7364-9535, メールは hatt1830002@live.jp

B 資料2)平安時代の東大寺の僧、裔然が宋の皇帝に出した「日本王代記」の神話部分と誤字脱字事例の表。古事記日本書紀と対比。天御中主から始まる人為性。古事記の1書からの類似性、日本書紀の膨大な一書群との一致と、異書群の多さ、イサナキからの一致、裔然の方はスサノオの方がアマテルより先に来ている点、神武以前は筑紫城にいたとの明記、古田が1言1句誤りなしとして三国志を解説したことに対する反論として、中国史書の倭国に関する、誤字脱字例として引用された学問上の事例がある。3)次から「盗まれた神話」を読むに当たって、最終版に追加された三頁分。4)「失われた九州王朝」の最終頁の図表が大宰府を守るための図であるが通説では近畿まで、瀬戸内海の鬼の城まで図を拡大して、取り入れられている例を示す。

C 読書 今回から古田氏著作三作目の「盗まれた神話」から皆で読書したい。

- 1)第一の著作、『邪馬台国』はなかったから2, 3年で初期三部作と言われる、著書を出版した。いずれも朝日新聞社である。敗戦後の皇国史観崩壊後の日本の歴史を再構築するために、文献資料や考古学的資料を西洋歴史学並みに、客観的な資料に基づいて、科学的な研究手法を取り入れる機運が反対に振れ過ぎて、日本書紀の現代の常識に合わないところは全部神話として歴史的な実際の出来事から棚上げして、戦後古代史学は開始された。その代表は戦中に学問として研究発表した書籍を発禁処分にされた勇氣に敬意をこめて、津田氏から出発した。代表例は天皇の寿命の長さ、羽の生えた人間の活躍、三国史では距離の長さ、方向東と南。
- 2)それに対して古田氏は、不可思議な事象、不合理な数値。など津田史学の穏当な定見に古代史学が収まっているのに不満があった。
- 3)初めにと題して次のように書いている。神々はどこから来て、どこへ通って、どこまで行ったか。また天皇家の祖先はどこの地点から、どのように来たか、その一つ一つの道順がわかってきた。その解明の手法は人間の理性、先入観の排除、原文全体の表記のルールを見出して、それに従って、解説する。
- 4)これに対して、戦後の史学の「定見」は、記紀には造作が多い、これまで天皇絶対主義(皇国史観)の反省から神話や説話は天皇家の史官の造作として、深く論じて来なかった。これが穏当な見地とされていた。
- 5)古田氏は記紀の表現のルールから、「天孫降臨」当時の政治地図まで発見した。日本古代の未見の真実の「時間の扉」を初めて切り開いた。孤独の探究者にとって読者の意見感想が最大の「師」である。